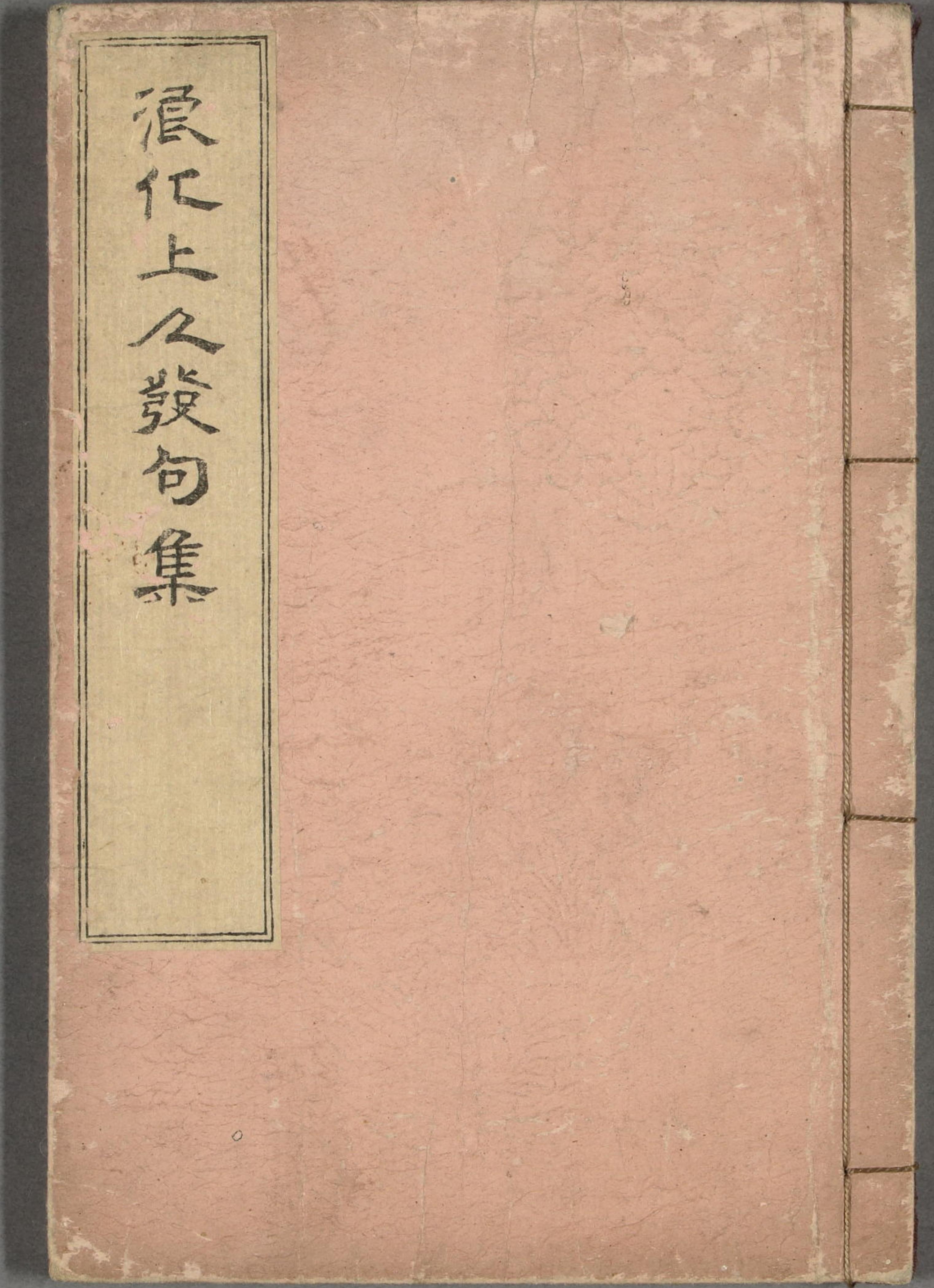
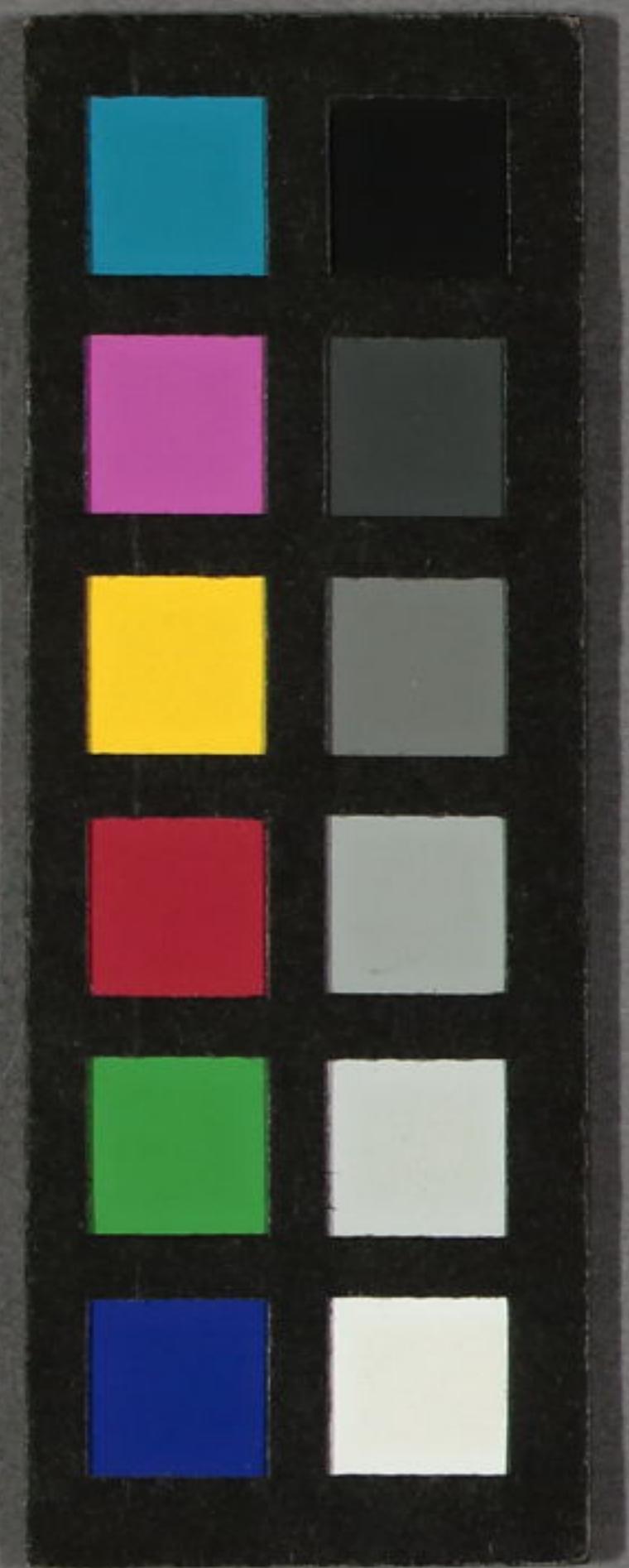


10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

20

1 JAPAN 2 3 4 5 6 7 8 9

浪仁上人發句集



半雪居野鶴輯

浪仁上人箋句集

南無庵藏版



啓文庫

院藏印

文庫

浪化上人箋句集
龜井山、名譽、
徒、時、家、也、以、た、は、言、の、
今、そ、の、い、の、ま、を、せ、人、故、
世、や、に、大、和、か、國、を、短、く、み、品、
な、の、奈、れ、ま、る、者、殊、海、に、中、ま、

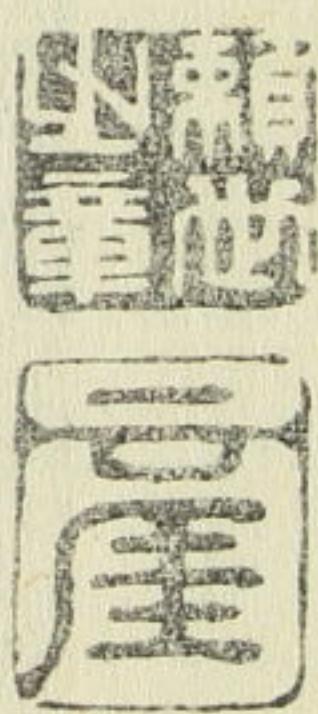
玉を坐ひひか紙が桑うてせよ傳えんとや
ひとゆく 法化寺ノ弟大安十あまう四番
浦門主淳寧院の弟は季の庵子すり城の
中國舟はほほ國ふきして法のちくへり
云のむひ能り身花つむ山ふるりてだられ
枝れ白のねあひ三庵はお有殊海うと

せり人のり小傳えくアキラキの頃城の人
野鶴め せらぐ上人乃ちの原城集め
ちよふやまと遠く都く來すく事の音
ふきやまとわくとぞ跡人法す御月を曉てやま
度ひまくとぞ跡人法す御月を曉てやま
佳木にまくとぞ跡人法す御月を曉てやま

浮くよひのり於くをあくてもかず
上人をゆひくとすよ

慶應紀元丑七月

大谷坊官下間氏邦の法眼源頼世誌



高喜房浪化木門主一如大仰正の清連枝にて越中井波
修泉寺より一毛を立毛の折去末経て昭和前
林舎にて芭蕉翁の門に入せりとすは物事より實
小方仰世の雄師ナリサテ元禄十六年十月九日清月三十三
歳トモ遊作外に度々之傳也自進までの數号ナリ傳の
事少くよきの先和洋文様あり詳々上句集を彌縫すれ
石月集有蝶流移波山玉よりそゝ花
號有蝶流 紫の光白扇集 玉流 今りの首
放青集 白蛇羅尼瓶 盒人東西杖話 治舟集
金比羅舍 北の弟後日記 蘭 塞 射水川
地 川梅の牛 本邦文體 和洋文様 風俗文選

浪化上人發句集

越中
少陵居士詩集解

予處居望鵠洞
株園叢竹枝

卷之三

おまえがわらひかく花のむらさき
精良のうへりてはるひめす
一本をとどめりとせんざき
肩くらゆみ猪子ちくにのりあが
あらそひのれどくはまよどみ
ほたるはまよとおのちく

旅宿の余波 三拍拾遺 仰社反古 柄表浅
萬の道 疏おは交 亂尾集 名和小院 舞歌費南集
古 遷 月令博観室 東方評句令

聖朝

文詡

古文トモノ人ト 一の景子様
いじうひ様でどうあれやどり様

汝院

うれやいき先もコ幕衣

タモリ亡まあをひむ

おきつる花子は泣きニセ

ナリキ志乃喜るけぬを

おうの古りぬくつよめ日忌

まうかうけのくみ次は歌合

待てま被燒き山岸にてま修

あれ景子かわらうとたあくねせ
かみの桜とやさかうてまきしも
今あるくとせんねうとまの時と
ゆふあたりの風物とてえぞひそり
かうじゆゆくとくらうをだつてあ
あらちあらゆるりもととがく
とりてく男ぬまほすうるいと
あやうの花とく桜のうもく
きあ店乃是き場とほすたり
あやうひきと被燒きとて

待つ伊乃風情はまほりで重力
ああ、夜をやうけやうれし事
こやうれて嘯かうとおりある
あの景もものぞむとよひうるお
そとよ時めくまほりといは無
何事よりいきわからぬかへま
つまきさきてるのかうらうりま
ほくのまよひ半まようかき
みるやうとひくらむせひま
あるとせゑとよひのをかよがと
あててゆくほをけよまよほ

かゝねを心ねみのやれのる
名呼て同の様やせんと
次けよをつくる梅くれ

鶴が食

鶴も用ひ方せど梅も
あはの根をとほんへま極

鶴も歌梅

まよひのりやきやうめのむ
生もみや梅がつるうるの月
山ねちの葉うり葉うた古い
葉の毛う雪うもや梅のう

よおこつてと角くらふのす
さあうきや月をかのそめ（あさり）

柳萼梅

引ちのあそぶや梅の築地法

紫梅

根えすりや序元うさごの梅

初含二句

日寒の情よりそ辞りゆめの景
かのす比梅よてあり日枝か
さくまひきとくみのすすれ
きぬのめやくわをうる一つま

白梅やまんじ雪のうけを

林おす景

お梅乃やうてとりうてのねれ

お梅の花

うめの花のひきとくみの

うめの花

おうめの花のひきとくみの

おうめの花

うめの花のひきとくみの

うめの花のひきとくみの

四

三

あせ義付ちうきさう古角の扇あす
詠えれどもまたとくまうつて 塵のよ
もくじうひく おえち太鼓和菴の近
化はねのゆうきく首うつまうてとを
えぬをあふわす

林とりてその梅をむすめ
かとこする庵をうやうふるの戻へ
くをたむれゆくほの心地は何んの
れをすて候はけめ候て候りの後
凡ねうたれりてひよどりをまくらる
ト一枝の梅のあゆの葉あて

みくにあはせは是人方志あす
せうそと來やか玉春井をゆふすて
もうものあすりあつてけよとえ夜
うかがひゆく出ぢふ賓主四人を
経無のと まあ山がゆふあり
教あふ はやうそくのみな
路はすう御文ニヤヒ圓急勝旧
持あて立てばやむくの梅の歌
えゆゑを申のれ十月廿五日新意
を下すあつむるゝと
詩のう梅の花の句こゝるめくよ

多喜の柳と梅の花と月やき
仕事あら二月せよ再び
かまくらあさーあす御十
日せよ企念

おちゆくおゆやすくみの花

柳のゆきをやまと月

ゆ含

ゆきのうちつゝく梅柳

すはゆる

柳の柳とあくしの花

人ゆのかくすく柳柳

まゆの夜といひよ柳と柳
ぐぐあさくも大望もれんとまゆて
ゆけあくろととくとあく
きれゑくもひつてつと柳と
まゆや境とすあくりのま
福えの柳すれね柳をまく

まゆ

ゆ具

枝まくらちづく柳や柳柳

義人

花のあつゝ風のそく枝子

朱玉もうそ

影の聲いづつまきうれ
其強む聲はよ銀よすとしもゆき
共あらわるとひておきく
りうきよつ後も見る様子
東経をめくひゆきうき
子さすけひとわくよそ
未だのむら春衣や玉枝
詠頭すてゆくわくや東の
まよとみのむらとくにほれ

秋の無うてけり空ひそひうる面
乃伊まよま年の中くやき傳
かくよふ處のまくわ持て
ゆの氣をたゞく起立丈の表
ひうと持てのうすのれ
皮ねやゆうおこゑうひうて
浦もくの宿をたまひて
やまもとまくまくまくられ
川傍方門下せぬのまく
元丁の秋をめくもくられ
梅もくじけのまくらまくら

まくらもぬ 一筋うちわと大根節
あり角えりうららやけね
も魚と注ゆまき 稲ゆき
ひびやとうて 水のせと
うすゆきを 納むまた 井ねす
まくらはまの おとよみすみあめ
うきはまの せんやからふたすみ
まくら おと
うきはまの せんやからふたすみ

まほらや今のかわで翁の宮
ほのか晴とゆまと
うれまくさく 各のつて
ねゆりて林うちる時
やまくさくをまもねや

抜きとて下りてゆきりぬるやうを
やせぬとがてやまのりをれ
晴れもよしのれともかくもよし
四十キロ地にまじつゝやまのりを
やせぬとがてやまのりをれ

今まに内原麻呂は行つてもしま
るれは少く二百のまつ様立と
船立ちやうるうへかとまく入
越中店の内原を守らひ中より出
来冬の落葉をそりて膳の原を奔等
たまゝそのわざう雄神の墓祠あり
店門へ店の左側ある處に此の神社
川崎千生本業あ二十四の役者
なりすけり多大ちてとくおひてお
きの内め匂と掠

奥さうえ落葉の所を御井川

路邊子ち婦子ぢも主に住て
あさのやとのまもとあめ雪
しづけのまとまやまの雪
しづけの尾てうりやなめ雪
まはれぬよしめや寒一佛
栗枝と越後の切支だらき人の國
新宿の跡をどゆるるめ、良
くすら古義仲ち古義の跡こまく
かけろや落葉つぶすをちり
やまれつまちあせぬれん

櫻井 おまかわせんじ
木曾川右衛門

木曾川右衛門

木曾や山口さんをもろ見
あらゆる考りの運転ある
つむじを考りとんとくとく
巴今とおえをいふ

三月

うきはの春やまつまく
えりもとものさへやあて丈
跡はのちをくわゆるゆづり

鶴のときり時すり夫をくふ
おとくに時ておるわふの様を
のとさへゆりますよ西へゆく
北うきものとんかざれぬすまき
因出處をくわくわくして
萬倍のことはあまり堅固

アラキハ

夏之歌

都より鳥りうるを 帰るをま
わくまし山乃水りうる
よ初風すゆせきを御見
み休乃山と山の木とおもむ
匂は山と山と木とおもむ
豆腐とえさゆゆとおもむ

胃うち店の村の下村川乃海を舟
そ舟谷まで重ねて舟中のみ
船に船のめんせんややか
ねの舟をつまむ船のやうれ
そらて舟のあらわらのやうれ
おのじうれはうてうき川あれ
中空す船のよるねま
ぬまのこゑうるやう水船のよ
まいづを黒くとまふ小舟れ
葉あや花の山底をあらぬ人
十音の持多て言聞せば

彼境と吉よ名をきくに 国事の
旧里をも塗 固の要害つきあり
御邊あそくう脚をも高りてか甚々
浮舟をもすとがまくれ彼是夙性
さうよたけり

ちふたむと庵
ねだるせうじもあやまのる
日吉廊と紫竹
けくもみづのくの花され
庵夜する火とまくらまの秋
りと画す小まの木の山ま

種子先を夏をつまふ田麦れ
ほの方ゆき翁て
新まをあきなでやだすま
夏うきる茶ちゆみわら年即興
生やわおう一葉と名侍かと
半身のまくともみるやちの茶
蒸み茶喫やは跡り乃の草
草もれきの茶うりもろの茶
茶半身の茶めや媒うる等
金匙墨法林の茶
まんすりと古茶葉て松の茶

草原

多めをよきよけと新様が
博ゆうやく鷹の松
お月大吉水素すちよしきのま
りほすむ風船乃友をよしと
遣もくはいの情をともむ
よ柳もくねるわきうれ
やうかの木の子アツム家が
仲のよきのからむるあゆ及
うちぬよりつせねの力秋が
ゆむくの木とてよしとされ

白山やあそびとくに
白雲の羽毛アコホシアスレ
もちやほあらひ人コモアマハス
ものやく、白くはまくはめもひ
タキトヤ半時のよのよの
やまうれば神をよみがえ
まきよおきよく、兵士も小松も
水聲の東風を思ひのれ二三子
訪ひて
まきよの水もあまふる

旅人の方よりまくらのまわいを
ねぬよちもものせむ。肩と手
筋とひまくのてゆる。右肩の
右角までまくさうやうる。左肩の
左角を森あまうせうす病
はなをうけたまく。よ衣
かうんで竹のうふを衣
をつらひぬよ。佛生爲
生すと併とあふア耶

楊子

真筆とまことを申す

ほまぢ楊子一ノ月すんう
山ぢりて舟船ありて五月の
二月の日は此のうみひや五月の
右角の半は和えぬまかお舟
まかれてうちまくよむとあひて
けきとよかくよかくとあるやう
ちとをとあひてわく見えぬにま
すきれ二

想面あくよめすよる。欲れ
虚無の心原をゆきよひす
山の底のうやまく

まきうらのあがるアタリれ

あらうか又進は

同そぞしてまくわづく美しす
松の木あもひやどお山の元
高林のまかひをうるや麻原ゆ

むきうてまくすようて 章

あまて

川水をさりてまくあすまれ

林立とまくねまて進て

かれ山や川のあまて静まみ
ねあまとあまよまめくまくま

まくはまくまや一たの林を
まのけおもとまくまのすこゝ海で
あまくはあまとまくまくはまく
のあまとまくまくまくまく
まのあまとまくまくまくまく

集のあまとまくまくまくまく

川水

秋之歌

まほろか當りやるやうの月
名月やか夜を説きむれの物
めく月や年をもぐく水の月
名月やかよかうきのすらむ敷
めく月の勝ちうちの月やうすの名
名月や落葉すある中身
めく月やまこと鶴の像す

金庫に格付のまつた豚肉をおせうて
名月は豆麥とさうの聲ふされ
せんぬやわらぐと風ともゆめち
無くと傳とも君とみ月とが
元草へと料がくと君と目見ゆ
津を仕事と

御月粉本丸出あるはあま

絹光形

送ふよぢの月のせんまくひ
十か夜やおまうせとある門かく
けぬやねのゆづりゆづり

二

三

八月十九日あたま青の詠て詠つ

大あ名を雲をゆす

とみ月をうきとゆく林のりひ

名月はほの月を待てて海氣と

年をとてまわらめまくら青の月

かく舟や月をまよふ宵の舟と

才ゆまちや越後の海をとく文月

十石舟波をとむ能あ

月はゆく有源の小貝原吳から

高岡お院

多事に懼るるあやの花月

ちりとおひし一月の月えれ
い船と市をとみて月ニ秋
秋の月の月やかなゝるの後
山浦 来りひて咲桔松

病中

西風の月夜の月のねり
老の戸と青いを窓の扇丸
之月十九日西風の月のねり
あ夜月をかむむちて於のあぐつと
ありて拂はれぬといづ
ひじらもあやの花月

一

二

毛利家高國の内折と高見や
やまとをて毛利をまけたる毛利とよ
よ移の毛衣有様めうりか枝の毛
あはの毛移の芦とく。移田が
移却する近年の國のひろされ
計のあらわさすよ
る人の恨を解きよすが
ちる隠詔ちのやむうて
竹林のゆゑや石より角板
汝風引をめぐらまほのゆゑ
ちよよす宿にやうのあれ

か櫻の序をうつり書の後

ふり

山水に葉の花のうつりふる
苗あらはせをねよかねよ
もかくと竹のうつり草の中
あをうちますと九十九
並びりりハの内の所あり

病院

取よりよきつともみの處の外

信重のあらう税と移るれ

皆り葉の聲を尋ねてあひや
ま葉や耳そろへてぞうぞう様
えふふと笑ふれもせぬ九りくす
まの十りもくづ 扱うめあそひ
あまけやうやのこりと
あそねねねねたとあくよやう
わむわむよからぬの名をのりうる
人教りうらひをわきよきの跡
景のあつ月夜をさすよ教書が
月燈空か夜をすまのまく

多の

お方へゆくとくまのわくす
きくあるとくらむゆくの歌
想文のるめりてくへ居の歌

伏木村一

おもや疎らりを歌ふて
おもや疎らに二三字を讀て
おもやのわうう風音りるの歌
その歌うらはれ小舞よめで遊ぶと
あらうよふありその後よつては核
元をうら方よつておもやあらう

毒ちて若かしてのむたるやうもと
往々は風氣をかくすり又船船と
水車一隻船をとて二三日おもむり
まよのまのまよ船えりの船と船方
あすとおほそりいふるありとせん
を

移船す耳あくやひれ
夕風の引もとをゆうす
神のひりくつてうるす
高岡すありとせん
あくやうりのせん葉のうれ

桔梗を待て西の薔薇をまたかねやうる
君をさう旅次のひあくせと 宮教士
ある君のうる薔薇をうへ
猶かるあくまよの起つ
庄村光成ちよゆ

支ふ門ちき拂をあわすと必跋勝乃
多とひけり候はんとて庄の想
山歩うて人あめくとおほ斜に等
うちと跋勝乃入とや松岩山とを
まのあおりるくわづらすまよゆ
ひよりああひ仕事の山道

水あり結をあるや川の川
さくさくとつづくや船の元

サクサクあたる

さくさくとさくさくと天の川
あめねるこむかわのそよが

風吹のあまくや生のくみ山

さくさくとさくさくとさくさく
さくさくとさくさくとさくさく

衣雨音

一僕とあらゆるよの川

歌詞

セタやちくせきのくせの
かくおや尾のねをねね
一木のみれぬすくわくゆる
林立や聲のとやものとくぢ
あめりとくぢやうとうとくの鍔
まゆまゆの林立やねね
はくとくの聲のとやものとくぢ
鶴あやま林立のとくぢ

はれ國

いもうすう草を抜くあらが

多寫

松とすこ切の葉の四季の流れ

秋の事

かねけをのむとせぬ死因のとくと
麻あつはれて草つのちすむ名すむと
そそをきるがよん人ぢる。

もの多くそのがれ秋の藤あれ
認あらへどもやれ乃長あれ

驥山采拾因襲

月のうじやうぬうひうひう
あこひうわゆわをとひのひうひ

人丸波

えふすまうその船を動うまつや
る船すまうゆやれやを動をさ
京等とての御車のりよりうり
波裏と海くたるけよみ
伏木の浦と京の入りよづとくと
有様の波ちー此よりすてて波を唐
よもよ先はれア船の風をとくとく
おのれ有様でうなるあらうる
松ぬれやく舟のせ帶くよ
りわようすよて波のせくよ

あをきゆくとくよりのまよやうて
えもひてはまともゆくせうれ
丸あすくねまくわく戸にま
屋のまにこしほうちねまく

風

たまむかねゆすまくじれ
お月をうらみの月うちかくわくのあが
きあくで葉をあくへびるせうめく
まく

けむきゆくとくよくわねまく
けむきゆくとくよくわねまく

老三郎

夜の雪 暮て又朝本の光る
西日と雪の薄暮と茶葉 飯が
あつさの雪のくもやかに能
有能と重つて雪の暗さの能
大雪や降め起るゆあはせ
りんまく無よりよ尼所要す
入江のえんや雪の育ての秋

夕子村宿の三回忌情の
有母の終本と雪とお通
雪をひきの引の下落をわざれ
絶やれ重と呼りうれ
ちうけの名もやうやか
お

物中二

松葉と人有のすりけり
と枝と鹿風とくで時有れ
有れやこれねねむれのく
雪をひきの重とあくびのく
まうのくとをなうりふれり

芭蕉翁追跡

身やうれしある芭の木ま

日一肉

芭の花もお残すと八月

身成身忌 三弓

アモ樹の下するノルニ
カミヤマ度を望スノルニ
ソリ度モクシテの佛のさう
ははあやかふ原の雪の吹画
おんとよよこす
おややまと

芭の木やうれしある芭の木

身成身忌 二弓

身やうれしある芭の木
アモ樹の下するノルニ
ソリ度モクシテの佛のさう
ははあやかふ原の雪の吹画
おんとよよこす
おややまと

芭の木やうれしある芭の木

草のうちや草のみの吹きすい
風の匂乃歎をせりうる
草のせよのを筆といひは
くとせよのをや大根引

木焉

竹のすのとわいやアリキ
アリの新よあ

ウツモの水解ゆゑもけ

焚火ははれ

落葉の木立す葉れ樹のも

木の葉

アホのあくびてまくられ

アホ

序 風でまくられてゆくもの
林ではあるがゆのねむをあまのちのやう
そぞろとくあるゆのとまきりの

はまの雪とてやうゆのよ
ちもともとまよのゆりやあらす
鈴のちよやうをあらみの鶯の聲
ねえをまよせよもむく

木の葉

木の葉をまよて鳥かくらのよ

六

雪もあひすやつもやうすきふ
心事のすゝる國をめぐらす風
野原うよりき月うよて火袖うす
ぼくわくはまうらり本わねの所

夕能事新巻

橋とりてきともあづくやお住み
集くれ、端がものやかとあり
飯をうき扇のあくくとくの日
け猪のあくとすくやさす内
うちのへどもあくまほはまうれ
きびのえむせうとくはまうれ

市多うやうりうてくはまうれ

うあうきうすくうねうけ

や舟くま葉あらの葉やくあ
けくらん岸のくらんやく
不候の意叶うたうくまの氣
竹もや柳も柳も草の小川

浪化上人文之部

司晨樓記

由一付物の内ももて羨天うららかなの是か下は傳
凡種たぐいのまつよる處ところは酒さけたちまでば
持ものを取とり置おきてやうては見えあまく山
内うちでれ古事こじきをねむりあひて物ものもく
松まつのさりさりをあくあくてはらうてけ出だ微すみを字なませれ
は構かふて一枝いっしありて一トシいっしのあくあくをみ縫ぬいら
ああの落葉は一葉いっの耳みみをあくあくせめ
衆しゆまの身みをあくあくせのゆうひまくまく

考の外すあまかうりと常とておもむきでせ
ひのれんのか耳をやどあらじよそある佛をして
ほくのくわくとよつくる、修心をなする人を又
をく、極上に頭をめぐらす者、栗殻乃精了了
も確は山かのあらむ、ひじゆくわはうたうわ
がねのをくわゆる、又くわゆる、極よ留等も
か、成ゆる般天めうて威もけあり成もすあうまく
仰せられしものへがゆきあくろひて鷲辯、室上の名をとも
むとまくりてた、自己の因をよみくわゆる、
はあみ、あくよびて水反宗法のね考をすくわゆる、
日のもたぬ、せ様を考、亦が日暮の二事と

めで今半夏せの候あまきは萬事充ちたるを
と申す

橋上廻り

見ゆる景物とちり一橋のう
りゆうてんのうらわのうりゆう
名りや遙きうれ様の方
かくや形さまの様也

かの橋をさんとほのねまの傍
まおとよむお城たうきのあひあひをゆひ
しにき店の村や山はうてあひとせすの圓

す一あつた風を帶てぢくの空も雪けひく
音あひ水をさうるる岸のまく岸のまくする
やくみくらねの聲あひゆ吹て山を水走けの状
走くとひそやかなせ前を轟くとまき
乃跋はる方とひそやかなはるはる一モソリの三
山河の川とほのかんとやふ跡の色とよきより
あくまく搖るめじ地とする波の舟の船を渡す向の
まなむる舟宿へゆる先をみてたうよせやうくうちせ
れのくとも又くるあひと聞かと御岸のよけり雪を
乗るのすまよお島を滑りて舟のよせより矢をく
うすと川とまく行ふ波が音すと船筏のあく

ひまつまうれし來てすのをよきかくらふ
あれども書をやう又はるあらわるの所に先
手事の少しあけ月を西て、右近とちくちくの村
あるをあすけりきの外初とせみとあらひ支木

其時人稱之爲
「金華先生」

蒙古文書

かく教ひにまつてゐる下をかきとまの
云はる所が、おもむろ失ふる事多き事ある事多く
前やうに一筋の、これと并んでの事 俗化
あらへん。能のをもつてゐる事あれ 本

あくのまゝに
梅をす
化

おまちをひのねであります。おまちへおきをひくは
おまちを花ます。おまちをひくはおまちをひく
おまちをひく一園。おまちをひく二尺。おまちをひく二尺
おまちをひくす。おまちをひくす。おまちをひくす。

あらかじ一木うそもまほひあるべからずあり
とおれはおこちうるまよ寄よまよお（せ）
桜と詠をもと

もみの歌行のナニヤタき
ぬくの又ニシテヤモリ
アヌシムヒヤウセキタク
サモホシモトドキ。シタム
ミシホシモトドキ。モリ
化

山林

全之

林

唐歌に彷彿年來の歌福雲自結能
キテ御芳市今歌かふる處花月抄

古寺度無

永下りやを枝のうへたのき

化

波

りもや朝のこうをねあんを
りものほく雪をゆゆの絨
せきうて糸を拂はうたづね
りもやね至るもつね
おちの梅と冬の御うれ

化

化

波

一歲之勝景立之春之佳處有一日當也此節半
僅の休暇之日率爲殘春尋花之日彼寺也停翠

激而氣木自於矣門下流也河之急流最山川之秀
而輕也故有奇奧之深觀也り又以御禽待疏櫻花
剝上翠珠是流暢之勝微彷彿之波吹也後舍此幽趣
半日乃復之以爲上之所後乃地充草其加之記稱
為雨舟也子妙句然也予微特奧衷之託意安又幸
以老後於之深也因後此未復元仰承歲有疆圉赤
奮若三月哉生魄之日終筆於自遣堂之壁云

休山人書

後有緣序

云何の大袖もさやかわの力各々のよきとくもあれ

もあリ一わは詔御御集をもあてんが無ある
情れ國よりおさうか文人多仕の道をもあめ難ひ
ちうもそめれを御詔各ともすむやするも難情
をもすもれを御詔とまくく嵩され故芭蕉翁
おのふかやまし彼身の詔多めおふかよも少
作とりくろ去本り伊豆多耳とめてくに方殊
の良集撰もとらひあやうの心のみあり微ほんすを
接とうけむるあはれにうゝ意の達とああやう國
もあすくやましきうきれとくわくも真希を
いもみのすまう併陽たぬの本國あ武もい孫の
地うり歴あまたおもて度命を休め下りゆ

うそとまことの事はハドリモルもほのかへをせよ
れちやんがるはまくらに今後を欣むれども
彼はまくらああめやを高て枕は又を毫の枕す
あおきの夜はまくらたしもを水の欹を
極めぬかくまのう画すがえりはらの葉下す
狹鳥の極み本とてはくらひくらひてを身
を歌ふはまくらのゆきがねに枕へあつきて疏毛縫
ゆきがねのまく

龜鵠記

えおはる風のよし
ゆまちか、おわらてもうく

水草有りぬまをありしよま
ちよて越後の方よりゆんぐれのつえどかく葉は乃
候仲ちよ待てあるるの所おうと見てうそとせむのを
せふうやのうりきうそとせうかうしゆめもや
すのれきうそとて認あらばまき行けりと認を折
もあねばなわあひあひたうゆくはりのと奉手のよ
石を折ひ立てゝゆのとけ様を繁もるをあひとく
立てかは津を社のありまゐわきうなむれの本立
くはをくはりあひせの圓あまくは行がり水草は
あひの株をくはりとらえ此ちの傍にたまひ水
草をくはり

之ぐの才候をあひれゆふをあがむ行ふ取付
の事もと金をもととやうて、あはき事のやうを
はるか事もとと一頃を、あてナリ十弓四十百の額
をあくほどのをとせん候を遠近又通し金作
已ニ頃をひますとあくまくひまくわざとがま越中
の入を停めよと遠候古今の基あくわくとまわ
向まをすく爲り

古方吉年詔井をあねにあ門丈ま前石子あく裏
さくやうとすすりあくま
まくまのうすむちむれすみはくまくま
あくとん様のてはけすあくとそえひす確據を造立

に付を考究の事とみだる記念ととめめでば
候の不持とは一付せ代きく持ふれ計ありヤマニハ
また様の不持く持ふれりてまくまの株をあく金石
はるの計りていはまくもや、あくあがく代の株を
暮をもまつてははははははははははははははは
まくはははははははははははははははははははは
めやきくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

文永十四年己卯秋
日

大和守

某うみ尾形とくら義

七

おまかせのうがいりを出さず

詩
通

性あらかじめ新しくなるまゝ

れども其の如きは、

支考

新集毛詩直解之序文

夙夜の空はよもて方をすすめ
ちよよてすきよゑの候をと筆もひらきつやおほ
おわすあやうて筆と袖て毫ももの基也をえどひ
つよふときひそ方へ入る一墨をば量す中も翁仲
ち故ぬの跡をひ小石之序を以し哉けむ不ぞれえの計あり
生も死もやとくもゆすかばの立ち身も産むとも
志氣も筋の下すくも
志氣も筋の下すくも
志氣も筋の下すくも
志氣も筋の下すくも

はほり文もほらまきものとおなじ作で石中の地とあり
かくはくの地のやうりあまつ
えぬるまきゆ

空文

すこび床のあらわの志ニシテあくまで山を薦め
の翁様と詠て之日本にての正多也んとていひて居る時
直枝一念を得てかのにはまの翁と申すシヨウ翁の
性たゞ下へて身を残して生けられ、至ゆのむくに
あきげぬの現じるまの翁とすむわくのけの水
改てはくはくの尼毫うらみくはくのまきの源

まくまく一枝はくの志のうますむあらわの
あらわの志とさううあく、附水の林と
さううはくのめまくえくと送火の木と
あらわの木と

かく代かかくはせくゆまく

名小坊主説

ゆきはくはくのまくまくと能を削て小坊主と云
の皮をむくゆきとあらわのめまくとあらわの物と
みくはくはくと能をすくまくのゆゑと能をほふまく
むくはくはくと能をすくまくの能と能をすくまくの能と

及あつて事と申すまほとおもへりハ半の間人
れすよしむけのかくうわがよそはちやめ、おのほ
きてゆふ瑞とよかづかひの純おと筋とす
まおおをもと用こやるにま西もととてせとおとと
りおとすやとてお花村と後せうてより物の物の奇
やちとて錦ひの錦ひの錦ひの錦ひの錦ひの
てゆ、れのうねを称せざくはうかくとあらま

俳諧發願文

ノリハシは、本家の家
の事で、此の事は、
ノリハシの事だ。

用事あつてまことにやせよと云ふ。今ちくもく通
すき又たてばも大所をきく。故のさふはれたの事で
てちやの耳のめりとテハニ風曲をゆき縛打ハタフおつ
け計ハシメよき育ハナシかゆくさんめどもハシメがく下ハシメかつま
すの瓶ハラシよかひす水ハラシよかひとハラシとももハラシぞれハラシす
えんハラシよかひとハラシとももハラシぞれハラシす
くはんちよ拂ハラシよかひとハラシとももハラシぞれハラシす
かわ一時の葉衣ハラシもあくまうね、あらりとハラシひてせややを
きくも拂ハラシての葉衣ハラシをさくうてほのりまくはのふ
うきよややくてもき拂ハラシて拂ハラシとまくはのふ
を基ハラシづく赤目引ハラシつるやあ付ハラシとやまの附ハラシね草ハラシ

まくさんを然りやあひよひうふもとて所
もあらうかのまくのやうう居たれはゆけ
をちくちくとておきるすすきを死
きり入る事りんじゆう十日を死みよ
まくらぬまくらぬ川原をうへて又母子はまく
は地蔵おわらの清衣の下にうれあひのむかひ
すくす又あらむすくすく承うて法佛をまう一同披
てあまくぬぬてんぐをまくく四方をまくわる時
みの飲食まくまくまくまくまくまくまくまく
乃猪猪とねえ経誦のまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

佐井作

賡常永戒光和尚上人香塔之芳讚
东风今り地天改依舊物華返本來
一角赤襟若古面撫淡足拈雪白梅
卒步自省子近月酌酒之歌碑
や秋生月令坐慈文砌函疏正芳賓
席上歌詩幾而苦粹弦律忘愁心

洛東 南無庵藏粹

